

スポーツランドみやざき考（2）

戸島信一（宮崎大学教育文化学部、社会学）

1. 問題意識と課題

昨年の報告では健康立県の及び地域活性化の方法の1つとしてのスポーツランドみやざきのこれまでの経過と、具体的なイベントとして国際青島太平洋マラソンの参加者の動向を通じて、県民のスポーツ参加の状況を考察した。「見る観光」から「する観光へ」の変化や、健康志向、生きがい志向＝自己実現の手段としてのスポーツに取り組む人が増えている。特に近年フルマラソンへの関心は急速に高まっており、第2次ジョギングブームの到来を実証的に明らかにした。今回はその後の推移を確認すると共に、誰でも、何時でも、何処でも実行可能な手軽なスポーツとしてのジョギングとその延長線上にあるマラソンランナーの動向を詳しく分析し、スポーツランドみやざきの現段階での到達点と今後の課題を整理してみたい。

2. 観光客誘致中心から県民参加のスポーツイベントへ

観光的問題意識（シーズンオフの宿泊客誘致）から始まった青島太平洋マラソンは、このところ海外からの参加や、全都道府県からの参加者を得るなど宿泊客の獲得にはかなりの効果があったと考えられる。また2008年からは、市街地の真ん中を走るコースに変更されると共に、制限時間も緩和された。さらに地元新聞が全完走者の名簿を新聞に掲載するなど、青太を大々的に取り上げるようになり、マラソンへの関心が高まり県民の参加者も増加傾向に入ってきた。地元参加者の増加は、応援の増加を招き、青太は一時期の停滞を脱し新しい段階、第2ステージを迎えた感がある。

そして宮崎県は、この国際青島太平洋マラソン大会を皮切りに、1月から3月の観光のオフシーズンに、1月のプロサッカーチームのキャンプに始まり、2月のプロ野球のキャンプ、そしてアマチュアの社会人や大学生のスポーツチームのキャンプ地として賑わうところに変身を遂げた。今や冬の宮崎はスポーツ天国になっていると表現してよい。

3. 国際青島太平洋マラソンへの参加者の動向分析

(1) 男子の場合

フルマラソンの部が設置されたのは、1990年であった。その当時のフルマラソン人口はまだ少なく、男子でも参加者は4桁にとどいていない。参加者で最も多い年齢層は30才代であり、40才代、20才代が3桁であったが、50才代、60才代はまだ少なかった。その後第1次ジョギングブームの影響で、2000年まで参加者は順調に増加した。1994年から最も多い年齢層が40才代になり、1996年にはこの年齢層だけで4桁に達した。

しかし、2000年代に入り参加者は停滞状況に入る。2000年の4,607人から2006年には4,042人とむしろ減少している。図1に見るように20才代、30才代、40才代はいずれも減少傾向をしめしている。その一方で50才代と60才代は順調に増加を続けてきた。高年層のスポーツ熱の高まりは、この間の若・中年層の減少を補う形になっている。ジョギングはかなりの高齢になっても実行できるスポーツであることが認識され、健康と若さの維持、アンチエイジングのスポーツとして実践されるようになった。

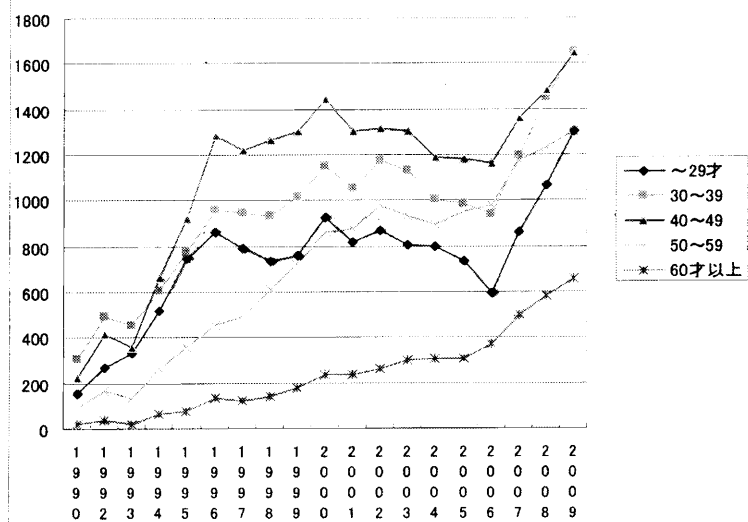
そして、その停滞状況から再び増加傾向に転じて来たのが、ここ3年である。2006年から2007年にかけて1,065人の増加という過去最大の増加を記録し、2008年にかけては727人、2009年には747人の増加を示し、はじめて6千人の大台を突破した。この間の増加は50才代や60才代での堅調な増加が続いているのに対し、20才代、30才代での増加が著しくこれは先

述した地元新聞の力の入れようの変化が、若い年齢層に参加に影響を与えたものと考えられる。

表1 国際青島太平洋マラソン男子の年齢階層別エントリー者数の推移
(単位：人、倍)

| | 男 子 | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|-------|-------|--------|
| | ～29 才 | 30～ 39 | 40～ 49 | 50～59 | 60才以上 | 合 計 |
| 1990 | 151 | 307 | 221 | 87 | 18 | 784 |
| 1992 | 271 | 494 | 416 | 165 | 40 | 1,386 |
| 1993 | 330 | 456 | 357 | 133 | 22 | 1,298 |
| 1994 | 518 | 609 | 662 | 259 | 61 | 2,109 |
| 1995 | 748 | 773 | 920 | 359 | 78 | 2,878 |
| 1996 | 863 | 956 | 1,284 | 454 | 137 | 3,694 |
| 1997 | 790 | 945 | 1,216 | 493 | 119 | 3,563 |
| 1998 | 731 | 933 | 1,265 | 610 | 140 | 3,679 |
| 1999 | 759 | 1,018 | 1,304 | 721 | 176 | 3,978 |
| 2000 | 923 | 1,147 | 1,441 | 860 | 236 | 4,607 |
| 2001 | 814 | 1,056 | 1,304 | 876 | 235 | 4,286 |
| 2002 | 869 | 1,172 | 1,312 | 974 | 260 | 4,587 |
| 2003 | 807 | 1,128 | 1,301 | 933 | 300 | 4,469 |
| 2004 | 797 | 1,004 | 1,185 | 893 | 308 | 4,187 |
| 2005 | 731 | 983 | 1,183 | 951 | 308 | 4,156 |
| 2006 | 596 | 940 | 1,162 | 974 | 370 | 4,042 |
| 2007 | 863 | 1,196 | 1,360 | 1,172 | 496 | 5,087 |
| 2008 | 1,063 | 1,452 | 1,483 | 1,233 | 583 | 5,814 |
| 2009 | 1,299 | 1,656 | 1,648 | 1,300 | 658 | 6,561 |
| 2009/1990 | 8.60 | 5.39 | 7.46 | 14.94 | 36.56 | 8.34 |
| 2009/2000 | 1.41 | 1.44 | 1.14 | 1.51 | 2.79 | 1.42 |

図1 国際青島太平洋マラソンの参加者の推移(男子)



特に 20 才代は、50 才代にかなり水を開けられていたが、この 3 年間の増加によって肩を並べる数になったし、30 才代は 40 才代を 15 年ぶりに上回るに至った。高年齢層では新たに走る人が増えて

増加するというものではないが、基本的には長年走り続けた人たちが加齢によって、上の年齢階層に移動してして増加するのが基本であると考えられる。ともかく、男子ではこのように第2次ジョギングブームが、若い層から高齢の層まで幅広い年齢層で起きていると考えて良い。

(2) 女子の場合

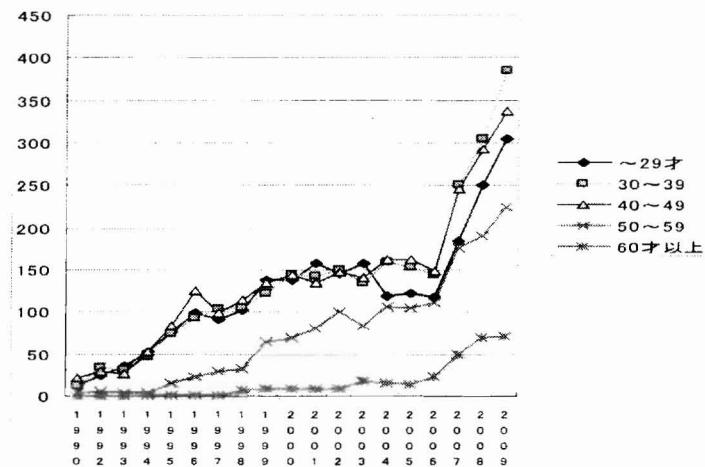
女子はフルマラソンの部が始まった1990年当時は僅か51名の参加で、全体の6.1%で、男子に比べても少なかった。最も多い参加者は40才代であり、30才代、20才代がこれに続く形であった。

表2 国際青島太平洋マラソン女子の年齢階層別エントリー者数の推移
(単位：人、倍)

| | 女子 | | | | | 合計 |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | ～29才 | 30～39 | 40～49 | 50～59 | 60才以上 | |
| 1990 | 12 | 13 | 22 | 4 | 0 | 51 |
| 1992 | 25 | 34 | 29 | 6 | 0 | 94 |
| 1993 | 36 | 31 | 27 | 5 | 0 | 99 |
| 1994 | 52 | 46 | 52 | 5 | 1 | 156 |
| 1995 | 76 | 74 | 83 | 15 | 2 | 250 |
| 1996 | 99 | 93 | 125 | 23 | 2 | 342 |
| 1997 | 91 | 103 | 99 | 30 | 1 | 324 |
| 1998 | 102 | 105 | 114 | 32 | 7 | 360 |
| 1999 | 137 | 122 | 134 | 65 | 10 | 468 |
| 2000 | 137 | 144 | 144 | 70 | 10 | 365 |
| 2001 | 157 | 143 | 134 | 80 | 9 | 523 |
| 2002 | 146 | 150 | 147 | 101 | 9 | 553 |
| 2003 | 157 | 135 | 141 | 84 | 19 | 536 |
| 2004 | 119 | 159 | 163 | 107 | 16 | 564 |
| 2005 | 122 | 153 | 162 | 105 | 14 | 556 |
| 2006 | 118 | 144 | 148 | 111 | 23 | 544 |
| 2007 | 184 | 250 | 246 | 176 | 49 | 905 |
| 2008 | 250 | 305 | 293 | 190 | 69 | 1,107 |
| 2009 | 304 | 385 | 337 | 224 | 71 | 1,320 |
| 2009/1990 | 25.33 | 29.62 | 15.32 | 56.00 | | 25.88 |
| 2009/2000 | 2.22 | 2.67 | 2.34 | 3.20 | 7.10 | 3.62 |

その後、徐々に増加はするが、初期値が少ないので増加率は高いものの、数はなかなか増加しなかった。1994年に3桁を超え、1999年までは前年を下回ることなく増加を続けた。しかし、2001年に500人台になったときから2006年まで横ばい状態になった。この停滞状況は男子と同様に、若い世代の減少の影響が大きく、50才代、60才代は堅調な増加を示した。そして2006年を底に、2007年は361人、66%増加という最大の増加を見せ、2008年にかけて202人、2009年には213人の増加というかつてない増加を見せるようになった。全体に占める女性の割合も16.8%まで高まってきた。年齢別では、20才代、30才代、40才代がほぼ同じように増えてきたのが特徴であるが、この3年間を見ると、共に急増している中で30才代が最も大きな伸びを示している。50才代や60才代はその勢いからはややかけ離れている感じである。このように女性の参加者の増加も若い層の増加によってもたらされおり、男性以上に第2次ジョギングブームの勢いは強いと判断される。この点についての詳しい分析は前回の女性ランナーの調査によって解明したところであるが、その勢いは続いていることが確認された。

図2 国際青島太平洋マラソンへの参加者の推移(女子)



4. 宮崎県内参加者の動向

さて、この全国からの参加者を得て開催されている国際青島太平洋マラソンであるが、スポーツランドみやざきを標榜する県内の参加者の動向が気になる所であり、昨年の報告書では、開催であるにも関わらず、県内の参加者は少ない旨書いている。全体的な増加傾向が続く中どうなったであろうか。表3にその集計結果を示した。まず男子20才代をみると、1998年から2003年にかけては全体の参加者では増加しているのに、宮崎県の参加者はむしろ減少している。その後2003年から2009年にかけては全体で492人増加し、県内の参加者は339人増加しており、全体の増加の68.9%を占めている。県内の割合は42.1%から52.3%へ上昇した。また30才代は、2003年には2009年にかけては全体で528人増加し、県内は328人増加し、増加の62.1%を県内の増加が占めたことになる。県内の割合は、25.4%から37.1%に上昇した。40才代はこの間、全体で347人増加し、県内は188人の増加であり、県内が増加の54.2%を占めたことになり、構成比を24.4%から30.7%まで高めた。同じく50才代は、この間全体で367人増加し、その内県内が137人で、県内の増加が37.3%を占め、構成比は21.4%から25.9%まで上昇した。60才以上は全体で358人増加し、この内県内が110人の増加で、30.7%を占め、構成比が18.3%から25.1%へ上昇した。全年齢層で見ると、2003年から2009年に全体では2,092人、1,102人、増加の52.7%を県内の増加が占めたことになる。20才代は県内の比重が過半を占めるが、30才代以上はまだ比重は低いものの、各年齢層で徐々に高まってきていることを確認できた。

女子の場合は、20才代で2003年から2009年の間に全体で147人増加し、県内の増加は72人であり、増加の内の県内シェアは49.0%である。30才代では全体で250人増加し、県内は72人の増加で、28.8%が県内シェアである。40才代では、全体で196人増加し、県内は43人の増加で、21.9%のシェアである。50才代は、全体は140人の増加で、県内は22人の増加で、15.7%を占める。60才以上では全体で52人増加し、県内の増加は5人で、シェアは9.6%である。女子全体ではこの間785人増加し、県内の増加は214人であり、県内のシェアは27.3%である。男子と異なり、県内の女子の参加の増加は、他の都道府県からの参加者の増加に比べ伸びが弱く、20才代、30才代は県内のシェアは高まったが、その以上の年齢層はむしろ低下している。このように女子の場合は、県外のジョギングブームの波の県内への到達が遅れていると判断される。

表3 国際青島太平洋マラソンの県内・県外別、年齢別エントリー者の推移
(単位：人、%)

| | | | 1998 | 2003 | 2007 | 2008 | 2009 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 男 | ～29才 | 全体 | 731 | 807 | 863 | 1,063 | 1,299 |
| | | 宮崎県 | 368 | 340 | 392 | 530 | 679 |
| | | 構成比 | 50.3 | 42.1 | 45.4 | 49.9 | 52.3 |
| | 30～39 | 全体 | 933 | 1,128 | 1,196 | 1,452 | 1,656 |
| | | 宮崎県 | 271 | 286 | 309 | 486 | 614 |
| | | 構成比 | 29.0 | 25.4 | 25.8 | 33.5 | 37.1 |
| | 40～49 | 全体 | 1,265 | 1,301 | 1,360 | 1,483 | 1,648 |
| | | 宮崎県 | 353 | 318 | 315 | 425 | 506 |
| | | 構成比 | 27.9 | 24.4 | 23.2 | 28.7 | 30.7 |
| | 50～59 | 全体 | 610 | 933 | 1,172 | 1,233 | 1,300 |
| | | 宮崎県 | 161 | 200 | 245 | 330 | 337 |
| | | 構成比 | 26.4 | 21.4 | 20.9 | 26.8 | 25.9 |
| 60才以上 | 全体 | 140 | 300 | 496 | 583 | 658 | |
| | 宮崎県 | 32 | 55 | 82 | 134 | 165 | |
| | 構成比 | 22.9 | 18.3 | 16.5 | 23.0 | 25.1 | |
| 合計 | 全体 | 3,679 | 4,469 | 5,087 | 5,814 | 6,561 | |
| | 宮崎県 | 1,185 | 1,199 | 1,343 | 1,905 | 2,301 | |
| | 構成比 | 32.2 | 26.8 | 26.4 | 32.8 | 35.1 | |
| 女 | ～29才 | 全体 | 102 | 157 | 184 | 250 | 304 |
| | | 宮崎県 | 41 | 54 | 57 | 81 | 126 |
| | | 構成比 | 40.2 | 34.4 | 31.0 | 32.4 | 41.4 |
| | 30～39 | 全体 | 105 | 135 | 250 | 305 | 385 |
| | | 宮崎県 | 25 | 19 | 43 | 67 | 91 |
| | | 構成比 | 23.8 | 14.1 | 17.2 | 22.0 | 23.6 |
| | 40～49 | 全体 | 114 | 141 | 246 | 293 | 337 |
| | | 宮崎県 | 34 | 36 | 45 | 56 | 79 |
| | | 構成比 | 29.8 | 25.5 | 18.3 | 19.1 | 23.4 |
| | 50～59 | 全体 | 32 | 84 | 176 | 190 | 224 |
| | | 宮崎県 | 8 | 25 | 27 | 44 | 47 |
| | | 構成比 | 25.0 | 27.8 | 15.3 | 23.2 | 21.0 |
| | 60才以上 | 全体 | 7 | 19 | 49 | 69 | 71 |
| | | 宮崎県 | 1 | 3 | 5 | 10 | 8 |
| | | 構成比 | 14.3 | 15.8 | 10.2 | 14.5 | 11.3 |
| | 合計 | 全体 | 360 | 536 | 905 | 1,107 | 1,321 |
| | | 宮崎県 | 109 | 137 | 177 | 258 | 351 |
| | | 構成比 | 30.3 | 25.6 | 19.6 | 23.3 | 26.6 |

(各年の大会パンフより集計)

5. フルマラソン人口の都道府県比較と宮崎県の位置

2006年から開催が始まった東京マラソンは、わが国の第2次ジョギングブームに影響を与えたと考えられる。大都市東京を走るわが国初の3万人規模の市民マラソン大会の開催である。毎年参加希望者が増加し、2010年の大会は3万5千人の枠に対して8.5倍の申し込みがあった。その影響で新しくフルマラソン大会を開催するところも増え、ランナーズ紙によれば全国のフルマラソンランナーは2004年度の7万8千人余りから、2008年度には14万5千人余りへとこの5年間で倍近い増加を示した。ランナーズ紙の国内大会の集計をもとに、都道府県別のランキングを行い、その中で宮崎県の位置と特徴を分析する。この集計は1年間に完走(ゴールし、記録が残っている)した人の最も速い記録データを集計したものであり、複数回走ったとしてもフルマラソンランナーとしては1人として集計されているのでフルマラソンランナーの実数を把握できる。表4に示したように、東京マラソンの影響で、完走者が最も多いのは東京都である。

表4 都道府県別フルマラソンランナー数 (2008年4月～2009年3月)
(単位:人、%)

| | | 合計 | 男子 | 女子 | 女子の割合 | 人口比 |
|----|------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 1 | 東京都 | 25,065 | 19,517 | 5,548 | 22.1 | 0.195 |
| 2 | 神奈川県 | 14,799 | 12,400 | 2,399 | 16.2 | 0.166 |
| 3 | 沖縄県 | 13,214 | 11,115 | 2,099 | 15.9 | 0.960 |
| 4 | 千葉県 | 9,219 | 7,697 | 1,522 | 16.5 | 0.151 |
| 5 | 埼玉県 | 8,081 | 6,798 | 1,283 | 15.9 | 0.114 |
| 6 | 鹿児島県 | 7,693 | 5,603 | 2,090 | 27.2 | 0.448 |
| 7 | 大阪府 | 7,019 | 5,762 | 1,257 | 17.9 | 0.080 |
| 8 | 兵庫県 | 5,777 | 4,976 | 801 | 13.9 | 0.103 |
| 9 | 茨城県 | 5,373 | 4,669 | 704 | 13.1 | 0.181 |
| 10 | 福岡県 | 5,278 | 4,255 | 1,023 | 19.4 | 0.104 |
| 11 | 愛知県 | 3,849 | 3,281 | 568 | 14.8 | 0.052 |
| 12 | 北海道 | 3,743 | 3,180 | 563 | 15.0 | 0.068 |
| 13 | 長野県 | 3,255 | 2,781 | 444 | 13.8 | 0.149 |
| 14 | 京都府 | 2,883 | 2,427 | 456 | 15.8 | 0.110 |
| 15 | 徳島県 | 2,696 | 2,168 | 528 | 19.6 | 0.340 |
| 16 | 宮崎県 | 2,000 | 1,707 | 293 | 14.7 | 0.176 |
| 17 | 山口県 | 1,913 | 1,674 | 239 | 12.5 | 0.131 |
| 18 | 熊本県 | 1,863 | 1,551 | 312 | 16.7 | 0.102 |
| 19 | 新潟県 | 1,479 | 1,262 | 217 | 14.7 | 0.062 |
| 20 | 栃木県 | 1,177 | 1,007 | 170 | 14.4 | 0.059 |

(資料:月刊ランナーズ 2009年7月号より加工)

また東京周辺の各県がこれに続くが、興味を引くのは沖縄、鹿児島といった遠隔地の県が上位に入ってくることである。那覇マラソンや指宿菜の花マラソンといった伝統のある大きな大会を持つ県ではやはりフルマラソンのランナー数が多い。先述のように青太も結構大きな大会に成長し、県内のランナーも増えてきたが、残念ながら沖縄、鹿児島が上位にランクされているのに対し、宮崎県は16位である。もっとも人口規模が異なるので、単純に数だけでは比較にならないが、そこで、一番右の欄に、2008年10月現在の各都道府県のランナー数を人口で除した都道府県人口に対するフルマラソンランナーの割合を算出した。1位はダントツで沖縄である。沖縄には那覇マラソンだけでなく県内に多くの大会があり、老若男女問わず実に多くの人々がフルマラソンランナーであることになる。これは昨年度1年間に完走した人の数であるがそれでも100人に1人はいることになる。過去に1度でも完走した経験のある人は相当数いると考えられる。2位は鹿児島であり、離島を含め県内のフルマラソンの大会も多い。3位には徳島が入り、ここは最近フルマラソン大会が開催されるようになり一挙に増加したようだ。以下東京、茨城、宮崎の順である。宮崎県は南九州・沖縄の中では歴史もある大規模な大会があるにも関わらず地位は低いということになる。スポーツランドみやざきは、県外のアスリート達にとっては高い評価を受け人気が高いが、県民自らスポーツに勤しむという意味では相当遅れを取っているということになる。先述したように近年増加傾向に入ってきたとはいえ、ランナー数では人口規模がはるかに少ない徳島県より少なく、また冬の間も温暖な気候で屋外スポーツの可能な気候条件にという共通する背景を持つ沖縄、鹿児島には大きく水を開けられている。県民のランナー率では沖縄に5.5倍、鹿児島に2.5倍の大差をつけられている。女性のランナー数では1桁違い、両県の1/7という数である。同じような気象・風土条件(冬の気象条件は宮崎が最も良い)、同じような大会の歴史を持ちながら、しかも最もスポーツランドを強調してきた宮崎の現段階がこのレベルであることを認識しなければならない。

6. むすびにかえて

走ることは、内なる自然である自分の体を見つめることである。ジョギングはマシンを使って室

内でもできないことはないが、多くのランナーは自然の中を走る。外なる自然と、内なる自然を身近に認識しながら走ることになる。ジョギングブームの魅力はその辺にあると考えられる。屋外で走ることによって四季の変化を体で直に触れることができる。空気で感じる寒暖の変化、風を感じる、風の音、鳥のさえずり、川の水の音、咲き誇る花の色と薫り、田園風景の変化など五感で自然を感じる事が出来る。この外なる自然と自分自身の体と頭脳（思考）という自然が会う場がジョギングの世界である。その日々の出会いの場の節目、イベントとしてレース（大会）がある。別にわざわざレースに出なくてもことは足りるかもしれないが、レースの記録という時間で自分の精神的・肉体的体力（生物年齢ではなく、チャレンジ精神や忍耐力そして自分を磨いた結果としての現体的体力）を測定し、自分自身を認識するのである。自分の加齢による精神的・肉体的衰えを自然な現象として認めつつも、できるだけ若さと健康を保ち、可能な限り衰えをくい止め元気を持続させようとする営みである。かつては僅かであった60才代のランナーも1つの集団を占めるようになってきたし、70才代そして80才代のランナーも珍しくなくなった。身近に国際青島太平洋マラソンという大会が存在したことで、フルマラソンランナーになった宮崎県内の熟年・高齢ランナーは少なくない。彼らの走りに、人生の先達としての生き方を教わっているのである。スポーツランドみやぎに相応しい、ランナー達の登場に少子高齢社会をポジティブに考え、対策を考える鍵があるように思う。

参考文献

戸島信一：「スポーツを通じた地域振興に関する研究—スポーツランドみやぎの試みと県民のスポーツ参加、特にAOTAIを中心に—」宮崎大学教育文化学部紀要 社会科学 第21号 2009年9月 p33～47